



### 文化・芸術の薫り高い 常磐公園(旭川市)

森林インストラクター

**小沢 信行** (おざわ のぶゆき)

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを勤め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。著書に「こうしてできた北の銅像」。

旭川市の常磐公園はかつて、蛇行する石狩川と牛朱別川に挟まれた中州でした。1916年に開園しますが、3年後には牛朱別川の氾濫で荒れ果てます。その後、河川の切り替えを実施、1932年に旧河川が埋め立てられ、市中心部と公園が地続きとなりました。

こうして身近になった公園には戦後、公会堂、図書館、美術館が建てられ、常磐館内に文学資料館が開設されます。散策路沿いには小態秀雄の詩碑や本郷新のブロンズ像「風雪の群像」なども設置され、園内は文化・芸術の薫りが漂っています。



入り口の園名碑。かつて第7師団長が「常磐」と書いたため、地名の「常盤」と異なる名称に

### 赤い実のナナカマド

正面入り口から美術館の方向へ進むとすぐ、左手にナナカマドが見えます。公園内にはそれほど多くありませんが、市内の街路樹では最も多く、全体の2割を占めています。1976年には旭川の「市民の木」に制定されました。

ナナカマドは材が固く、かまどに7回入れても燃え残ることが語源だといわれています。寒さに強く、北国を代表する樹木で、真っ赤に色づく実は印象的です。

旭川生まれの作家井上靖さんは「雪をかぶったナナカマドの、あの赤い実の洋燈」(4条8丁目の文学碑)と表現しています。

旭川で暮らした作家三浦綾子さんは「ナナカマドの街を夢見て」(「心のある家」『三浦綾子全集 第20巻』)というエッセイでこう書いています。

「芽吹きの頃の、あのオリーブ色というのか、言いようもなく瑞々しい色が好きだ。六月頃になって、遠慮勝ちに咲く白い花も、何か誠実な人柄でも見るようで、心が安らぐ。八月にはいつの間にかつづらなナナカマドの実が少しずつ色づき、新秋の九月ともなれば、真っ赤な実が青空の下に輝く。そして葉も実も真紅に燃える秋になる。雪が来て、その紅葉がすっかり散りつくしても、赤い実はいよいよ赤く赤いままに冬を迎える。やがて純白の雪がその赤い実の一房一房を、まるで教会のベルに似た形にする」

「この木をこよなく愛してきた」と自認する三浦さんは「もしも旭川の街並が、すべてこのナナカマドの並木で飾られたら、どんなに素敵だろう」と思い描いていました。

雪をかぶった赤い実の季節はこれから。感情移入すれば、「ランプ」にも「教会のベル」にも見えるでしょう。



真っ赤に色づくナナカマド

### そびえ立つドロノキ

園内にはドロノキ、シロヤナギ、ヤチダモといった高木こうぼくが何本も立っています。これらは川沿いの湿った場所に自生する木で、ここがかつて川に挟まれた湿地だった証でもあります。

特に目立つドロノキは、年を経るに従い樹皮が緑白色から暗灰色になり、縦に割れ目が入ります。雌雄異株しゆういで、雌株は夏の初め、実が割れると、白い綿毛を付けた種子が現れます。

風で遠くまで飛散し、日の当たる河原で芽を出し、いち早く成長します。ポプラのように綿毛が飛び散るのは同じ仲間だからです。

ドロノキは泥のように材質が柔らかいのが名前の由来だとされています。このため、建材には向かず、薪炭材としての利用価値もありませんでした。

そこで開拓当時、注目されたのがマッチの軸生産でした。輸出産業として成長し、最盛期の1900年ごろには道内に60カ所を超える工場がありました。

しかし、伐採が続いて原材料が枯渇するようになり、次第に工場も減少。近年はマッチの需要が少なくなったことから、パルプ材として使われています。

本来なら郊外の河畔に自生するドロノキ。それが都会の公園でそびえ立つ光景は圧巻です。



ひときわ高くそびえるドロノキ

### 公園を詩にした小熊秀雄

常磐館の裏手に立つのが詩人小熊秀雄の詩碑です。小樽で生まれた小熊は、21歳で旭川新聞（現北海道新聞）の記者となり1928年、27歳の時、妻子を伴い東京暮らしを始めます。

当初は原稿が売れず、苦しい生活が続きました。詩人としての地位を確立するのは、1935年に長編叙事詩集「飛ぶそり籠」を出してからです。時流に乗り、風刺詩を手掛けるようにもなりました。

1938年4月には10年ぶりに旭川を訪れます。帰京するまでの2カ月間、滞在費を工面するため、旭川の風景を色紙に描き、淡彩画1円、墨汁ペン画50銭で売っていました。

また、「旭川風物詩」というタイトルで旭川新聞に自筆の絵を添えた詩を連載しました。その中の一つが「常磐公園所見」（1938年6月2日）です。

「公園の築山にのぼって 天下の形勢を見れば 池の水ぬるみ つつじ咲く 軍都にこの平穩あり ボートの中の仲善い 男女 間もなく彼女は 軍人を産むであらう！」

前年の1937年には日中戦争が勃発し、暗い影が国内を覆い始めていました。第

7師団があり、「軍都」と呼ばれていた旭川はなおさらのこと。1938年6月1日の旭川新聞は「緊張する軍都の第一日」という見出しで、防空演習の開始を伝えています。

そういう空気を感じ取った小熊は穏やかな公園の風景に、あえて「軍都」「軍人」という言葉を入れ込んだのでしょう。風刺詩を得意とした小熊ならではの軍国化への皮肉が感じ取れます。

帰京後、初めて咯血かっけつした小熊は、次第にせき、たんに悩まされるようになり1940年、肺結核のため39歳の若さで亡くなりました。



1938年6月2日の旭川新聞

### 詩碑の除幕に訪れた妻

小熊秀雄の功績を後世に伝えるため、旭川の旧友たちや旭川文化団体協議会が1966年7月、詩碑建立期成会を設立します。各界著名人の色紙即売展や募金活動を実施し、旭川市からは50万円の助成があり、目標の120万円を超える金額が集まりました。

碑は一般的な立方形ではなく、斜線と曲線を組み合わせたユニークな形です。設計を担当したのは旭川文化団体協議会事務局長の谷口広志たにぐちひろしでした。「小熊が生涯をかけた詩作への革新的意欲、その困窮の中で追及した<真実>、このイメージを暖めながら造形にとりくんだ」（『旭川市民文芸』1967年11月号）と振り返っています。

碑には小熊の遺稿「こゝに理想れんがの煉瓦を積み こゝに自由のせきを切り こゝに生命あざの畦をつくる つかれて寝汗掻くまでに 夢の中かでも耕やさん」が刻まれました。

除幕式が行われたのは1967年5月28日。招待された夫人のつね子が幕を引き、深々と頭を下げると、ハトと5色の風船が快晴の空高く舞い上がり、拍手が鳴り響きました。

つね子にとっては、夫と上京して以来39年ぶりの帰省。この間、耐え難い苦労の連続でした。

自身が書いた「小熊回想」（『小熊秀雄全集』月報）によると、5歳の長男が入院した時には、1カ月の入院費が払えず、退院の際、後払いを求める小熊と院長が言い争いになります。



築山から見た池の景色



小熊秀雄の遺稿が刻まれた詩碑

また、家賃の支払いも滞り、4、5カ月後には家主から費用を出すから退去してくれと言われ、同じような引っ越しを何度も繰り返します。たまりかねたつね子が働きに出たいと申し出ても、小熊は外に出ることを許しませんでした。

さらに、つね子を悩ませたのは小熊の女性との交遊でした。次々と新しい女性が現れ、自宅にまで連れてくる大胆さでした。

それでも最晩年、病を押して机に向かう小熊をつね子は献身的に支えます。「私と子供の生涯を、小熊はまことに死を以って守ってくれました」と記しています。

小熊の死から5年後の1945年には、一粒種の長男を肺結核のため20歳で失い以来、独り暮らしが続きます。

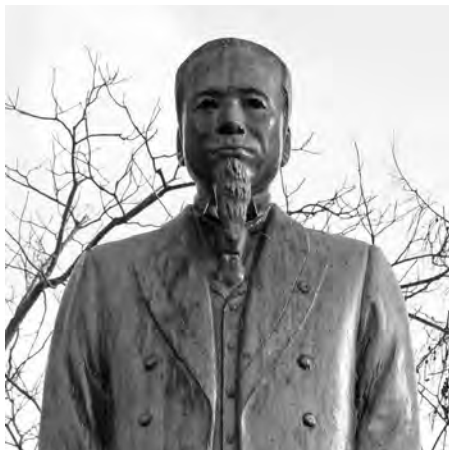
除幕式後、つね子は長い間隙を埋めるように2カ月間、旭川に滞在します。そして、しばしば詩碑を見るために公園に通いました。

生涯を閉じたのはそれから15年後の1982年、78歳でした。夫の倍の年齢まで生きたものの、困窮生活で壊した体は最期まで癒えることがありませんでした。

### 「北京」を唱えた2人の像

公園内の池のそばにあるのが岩村通俊<sup>いわむらみちとし</sup>像、公園の入り口前にあるのが永山武四郎<sup>ながやまたけしろう</sup>像です。岩村は北海道庁の初代長官、永山は第2代長官を務めました。岩村の銅像が最初に建てられたのは1938年で、現在の像は3代目です。永山の銅像は1967年に建設されました。

2人に共通していたのは、上川郡に「北京」<sup>ほっきょう</sup>を置きたいという思いでした。開拓使が設けられた当初、旭川という地名はなく上川盆地一帯を上川郡と呼んでいました。



岩村通俊の銅像

明治維新後、遷都で江戸が東京となったように、上川を北京とし皇居のある都にすれば、国民の関心を集め、移住促進につながると考えたのです。

かつて開拓判官を務めた岩村は、会計検査院長時代の1882年、道内を視察し、北京を上川に置く建議を太政大臣に提出します。さらに、1885年にも屯田兵本部長だった永山と上川を視察し、再び建議を出します。

政府が具体的に動き出すのは1889年になってから。北海道庁長官となった永山が総理大臣に北京の設置を上申すると、閣議で了承され、法制局に勅令案の作成が命じられました。

しかし、法制局の見解は、国都の体裁を整え繁栄を期待するもので、機能も実態も備わっておらず、巨額の資金を投じる効果も期待できない、というものでした。

これに納得しない閣議に対し、宮内省が持ち出したのが「離宮」構想です。皇室の別邸となる離宮を上川に置く計画が同年、裁可され、確定します。美瑛川と忠別川に挟まれた上川御料地内に上川離宮を建設するため道庁が調査し、結果を1891年、総理大臣に提出しました。

ところが、その後たなざらし状態が続き、1921年に宮内省の判断で取り消されます。この理由について「新旭川市史 第2巻」は、宮内省側が「皇室経費上造営に着手し得る状況でなく、加えて天皇がしばしばはるかなる地へ赴かれるような情勢でもないことを思い起こしたかもしれない」と書いています。

「北京」は結局、実現しませんでした。志を共にした2人は、くしくも同じ公園で銅像となり、街の行く末を見守っています。



永山武四郎の銅像